

---

# 暗黒姉妹

\*KEN\*

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暗黒姉妹

### 【Nコード】

N2857J

### 【作者名】

\*KEN\*

### 【あらすじ】

ゴルトベルグ王国の王家の姉妹であるティーナとマリア。

姫である姉マリアは近々他国の王子との結婚が予定されていた。

しかし、姉妹でありながらお互いを愛していた二人は当然結婚を拒む。

しかし、その無力さに嘆く妹、ティーナはある日の夜、Xという人物に出会う。

そしてその時にXはいう。

「あなたに可能性を与えにやってきた」

そして、残酷な運命の歯車は動きだす。  
姉は妹の為に……妹は姉の為に……  
たとえこの身を汚しても……  
あなただけは守りたい……

## 姉は姫 妹は騎士

とある時代のとある大陸『スピカ』

その大陸の極東に位置する国『ゴルトベルグ』

その国に二人の姉妹がいました。

一国の姫として育てられてた姉と騎士として育った妹。

二人ははつきりとした身分の違いがありながらもお互いを好いていました。

しかし、それはある日のことでした。

姫である姉はどこか違う国の王子様のもとへ嫁ぐことになってしまいました。

姉妹は必死に結婚を反対しましたがその努力もむなしく、姉は嫁ぐことになりました。

しかし、どうしても諦めきれなかった妹はある決断をしました。

その決断ははたして姉妹にどのような運命を与えるのでしょうか？

「姉は姫、妹は騎士」

ここ、ゴルトベルグ城はゴルトベルグ国のちょうど中心に位置している。

富豪国であるゴルトベルグの城はとてもきらびやかで、とても広大な敷地を持っている。

そんなゴルトベルグ城のはずれから、とても勇ましい金属音が鳴り響くのが聞こえる。

そこには、何百人という騎士がいて、今はその剣術の訓練中だったのである。

勇ましい大柄の男たちが豪快に剣をふるっているのが見える。

その様子はすごい迫力で、とても婦女子が入り込む余地はなかった。

しかし、そんな中ひときわ目に着く騎士が一人いた。

その騎士は、別の3人のごつごつとした騎士たちと剣を交わそうというところだった。

他の騎士たちに比べたらやたらと細く、背丈は高いものもまるで大人と子供のような体格差だ。

ショートカットの黒髪と、意志の強そうな黒い瞳が凜としていても美しい。

その騎士がいったん息を吐き、気持ちを落ち着けると城中に響き渡るような声で言った。

「来い！！」

すると、他の三人の騎士は一度にその騎士に突っ込んでいった。

そして各自剣をふりをろそうとした時には、すでに勝負はついていたのであった。

その一瞬何が起きたか三人の騎士は分からなかったが、上を見ると、青空の下、

自分たちの剣が空高く上がっているのを見ることができた……

先ほどの黒髪の騎士の名はティーナ＝ゴルトベルグ。

若干18歳ながらゴルトベルグ国騎士団団長を務めているのである。

そして、何よりも驚きなのがティーナは女性である。

騎士という職業、鎧をまとうことの多い彼女はよく男性と勘違いされる。

しかし、彼女はれっきとした女性なのである。

先ほどの美しすぎる太刀筋に騎士全員が見とれていると、

彼女は三人の騎士の方を振り返り口を開いた。

「お前たち、まだまだ全然ダメだな 私を倒す気があるのか？ そんなことじゃ魔物の餌だ」

彼女の黒く澄んでいる瞳がまるで、獲物を狙う肉食獣の如く光っている。

三人の騎士はその表情に血の気が引きながら深々と頭を下げた。

「すいませんでした!!」

「謝罪などいらん!!罰として素振り300回!!」

そう答えるティーナは朝からずっとこんな調子で気が立っていた。もとから厳しい団長である彼女だが最近はいつもととは比べ物にならないくらい厳しい。

その様子に周りの騎士たちはひそひそと話しあっていた。

「最近団長厳しくねえ？」

「確かに　なんでだろ？」

「あれじゃね？　あの女の子の日……」

「貴様らあ!!」

「!!」

他の騎士たちの声はしつかりとティーナの地獄耳に入っていた。

恐る恐る騎士たち全員はティーナに目をやると先ほどとは比べもにならない殺気を放っていた。

「誇り高き騎士団の訓練中に私語とはいいい度胸じゃないか　なあ？」

顔は笑みを作っているがその内心はとても言い表せない怒りが丸見えである。

「……すいませんでした!!」

全力でティーナに謝る騎士たちだが当然許してもらえるわけもなく

……

「そうだなあ……鎧のまま何時間耐久で走れるかな？　10時間ぐらいか？」

「……」

「それとも鎧のまま泳ぐか？　私も泳ぎたいところだしな？」

「……」

「地道にこの場で素振り1万回もいいな……」

「……」

全員絶句した。

彼女の眼はおそらくすべて本気だろう……

「どれがいい？ 選ばせてやる」

「……すべて死にます」

「大丈夫だ 人間なんとかなる」

「……」

もうダメだつと騎士団が全員思った瞬間、

突如、とある声が響いた。

「罰則はなしという方向はなくて？」

「なんだと……そんなことが……て!!」

ティーナは振り返るとそこにはブロンドのロングヘアに、

サファイアのような美しい青色の瞳を持った一人の女性が立っていた。

背は決して高くはないがその容姿はとても美しいものだった。

「……姫様」

ティーナは哑然としたような表情でそういった。

彼女こそがゴルトベルグ国第一皇女、そしてティーナの姉に当たる人、

マリア「ゴルトベルグなのである……」

「ごきげんようティーナ」

につこりとほほ笑みながらティーナに挨拶をするマリア。

その様子にはティーナも牙を無くした虎のようになっていた。

密かに騎士団は全員ガッツポーズをとっていた。

「ティーナちゃん、なんでも厳しくすればいいってものではないでしょ？」

「しかし姫!! こ奴らは神聖なる訓練中に私語を……」

「いいじゃない ちよつとぐらい」

「しかし、それを許すと騎士としての規範が……それに最近は魔物が出てくるというのに……」

「それもそうね」

「!!」

まさかの言葉にまた騎士団は青ざめていった。

姫様をもつてしてもダメなのか？

「では、10時間耐久走を……」

「罰則は私が決めます」

マリアはきっぱりとそういうとティーナに同意を求めた。

ティーナはしぶしぶとうなずく。

騎士団全員がマリアが口を開くのを固唾をのんで見つめている。

「罰則は……」

みんなの息が止まる。

「今日はもうゆっくりと休養して、明日から私語なしで訓練にのぞみましよう!!」

「!!」

ティーナ以外の騎士団は飛び跳ねて喜んだ。

しかし、ティーナが慌てて反論する。

「しかし姫様!! それは罰則では……」

「いいじゃない 厳しすぎる団長には誰も付いてきせんよ?」

「しかし……」

ティーナがまだ何か言おうとするとマリアはティーナのもとに近づきそつと囁いた。

「訓練ばかりで最近さびしいわ」

「あの……」

「部屋で待つてるから」

「!!」

マリアがそういうとティーナの顔は見るみると赤くなっていた。

その様子ははたから見ても確認できた。

すると、ティーナはうつむきながら口を開いた。

「……分かりました 今日の実訓はここまでにします」

そういうと、他の騎士たちは全員ティーナの方に礼をする。

「ありがとうございます!!」

「ただし!! 明日からは私語なしだぞ!!」

「はい!!」

「では、解散!!」

すると、騎士たちは全員訓練場から散らばっていく。  
その様子はどこかとてもうれしそうだ。

すると、マリアが私語をしていた騎士のひとりをつまえた。

「あなたはティーナちゃんに失礼なこと言っただけで持久走」

「ええ!!」

「やるわよね？」

マリアのその笑顔の黒さは、ティーナの比べ物にならないものだった。

哀れな騎士はマリアの絶対的な目に逆らえず、しゅしゅと持久走を始めた。

双子の姉妹は決して外見はとても似ていないが、中身は意外と同じなのかもしれない……

ティーナは着替えを済ませ、鎧を外し、マリアの部屋の前まで来ていた。

コンコン、っとドアをノックすると中からマリアの声が聞こえる。

「どうぞ」

「失礼します」

そういうと、ティーナはマリアの待つ部屋の中へ入っていった。

マリアは入ってきたティーナを椅子に座らせると微笑んでから話し始める。

「さっきは余計な口出ししてごめんね ティーナちゃん」

「いえ、先ほどは私も頭に血が上っていましたが……」

それに、今考えればそれほど怒るようなことでもありませんでしたし……」

ティーナはマリアに頭を下げる。

すると、マリアはティーナの頭をなでてきた。

「ティーナちゃんは気真面目過ぎるのよね」

「……申し訳ございません」

「でも、そういうところが好きよ」

「……」

ティーナの顔色が赤くなる。

本当に、どうしてこの人はこうも優しいのであろうか？

「私も……姫様の優しい所が好きです……」

緊張しながらもそう答えるティーナに向かい、マリアは意地悪そうに尋ねる。

「それだけ？ 私の好きな所……」

「と、とんでもないです！！ ふんわりした綺麗な金色の髪も、その綺麗な瞳もすべて大好きです！！」

すると、マリアは笑顔でこたえる。

「私もティーナちゃんの全てが好きよ その綺麗な黒色の髪も瞳も

……」

「そうですか……」

ティーナは少し沈んだような声で答えた。

実はティーナは自分の髪や瞳の色が大嫌いである。

なぜなら、このゴルトベルグ国は人口のほぼ100パーセントが金髪、青眼であり、

それ以外の色は差別扱いを受けるのである。

それは、王族として生まれたティーナにも決して例外ではなく、王宮に残るための優位つ的手段として選んだのが騎士として生きる道だったのである。

しかし、騎士団に入ってから、女性でありなおかつ差別対象であったティーナは酷く虐められた。

何度も自分の髪色などを恨んだ。

しかし、マリアだけは違った。

マリアだけはいつもこの色が好きだといってくれた。

「ティーナちゃん！ 話聞いている？」

ぼーっとしていたティーナは突然聞こえてきたマリアの声に驚いた。

「は、はい、聞いています」

「なんかまた、余計なこと考えてたでしょ!？」

「……申し訳ございません」

やはりマリアはすべて見通している。

すると、マリアはティーナに抱きつきそつと囁く。

「余計なことは考えないで……私は本当にあなたのことが好きよ  
愛しているわ」

突然の言葉に心臓がはちきれそうなほど動いている。

きつと、10時間耐久走をやってもこんなに鼓動は早くならないだろう。

ティーナは慌てながらも自分も答える。

「私も愛してます…… お姉さま」

その瞬間だけは時間がとまったように感じられる。

こんな時がい詰めでも続けばいいと思う。

しかし、時として現実是非情である……

「しかし、姫様…… あなたは1か月後には結婚が控えていますので  
こういうことは……!!」

ティーナが気づいた時には既に唇を奪われていた。

マリアはティーナに長いキスをする口を話している。

「私は嫌よ!! ティーナ以外とこういうことするのね」

「姫様……」

「あなたはどうかの? 私が他の誰かとこんなことして何んも思  
わないの!？」

「……」

ティーナは黙ってしまった。

先ほど述べたようにマリアは一国の姫として他国の王子との結婚が  
1か月後に予定されている。

ティーナは確かにマリアのことを愛していたが、

身分的にもそして性別的にも決して結婚などとはできないのである。

ティーナは口を開く。

「私の役目はお姉さまを魔物からお守りしてこの国の発展に貢献することです……」

「もういいわ、出ていきなさい……」

「……」

マリアの拒絶する声を聞き、ティーナはマリアに頭を下げるとドアの外へと出ていった。

一瞬扉を閉める時に見えたマリアは顔を手で覆い泣いていた。

扉を閉め終えるとティーナは一息ついた。

すると、自分のほほに何か冷たい感じがする。

自分で触れて確かめると自分の瞳から涙が出ているのが分かった。

もし、マリアを自分以外の人が触るようなことがあったら……

「なんでこんなに胸が苦しいんだろう……?」

理由は分かっていた。

ティーナは一人ゴルトベルグ城の廊下に泣き崩れた……

その後、ティーナは何も気分が盛り上がらないまま夜を迎えていた。今の季節は春なのだがやはり夜はまだ冷え込む。

そんな夜にティーナは一人、城の外の警備を行っていた。

といっても、

今の彼女はマリアのことで頭がいっぱいなので侵入者などいても捕まえれそうにもないが……

しかし、やはりそこらへんは騎士たるもの、公私混同しないため自分に気合を入れる。

きっと姫も今の気持ちは一過性の症状のようなもんなんだと思うようにした。

彼女は前を見た。

すると、そこには月明かりにを受けながら散りゆく桜の木があった。その綺麗さは目を見張るものがあった。

しかし、注目は別の所に行った。

その桜の横になにか見知れぬ人が立っている。

「やっと気が付きましたか？」

謎の人物が声をかけてきた。

その人は全身黒服でなおかつフードで顔を隠している。

そして、その中性的な声は男女の区別すらつかない。

「誰だ！！貴様は！！」

ティーナがそう怒鳴ると、剣を抜こうとした。

しかし、剣を抜こうとしても剣が抜けない。

「なぜだ！？」

ティーナが慌てていると、そのフードの人はいつの間にかティーナの目の前にいた。

「ここは手荒なまねはしないでいきましょう ティーナさん」

「なぜ私の名を知っている！？」

「名だけにはごさいません あなたのことは全て知っているつもりです」

あ、そういえば私のことはXと呼んでくださいね」

「……」

なにものなんだこいつ？

ティーナはそう思った。

怪しすぎる。

しかも、体がなぜか硬直して動かない。

「それにしても気が短いですね やっぱり愛するお姉さんのことで気が立ってます？」

「……なぜそれまで知っている！？」

ティーナは噛みつくように言った。

もし、体が動いたならばただ殴っても吐かせようとするが……動かない。

Xはさつきまで穏やかな口調でしゃべっていたが突然真面目な声色に変わった。

「私はね……あなたに可能性を与えに来たんですよ」

「可能性？」

言っていることは訳が分からない。

しかし、なぜかその話を聞いてしまう。

「そうです 可能性…… あなたのお姉さんが結婚しなくて済む可能性です」

「……！」

一瞬その言葉に驚いたがすぐに冷静になるとティーナはXに言う。

「……そんなことあるわけないだろう」

「おや、どうしてそういいますか？」

「私だって…… お姉さまだって…… ずっと反対してきた でも無理だったんだ……」

ティーナのその口調はどこか寂しそうだ。

「私たちは…… 無力なんだ……」

「そうですね」

意外にもXはあったりそう答えた。

しかし、自分のポケットから何か粉末の袋を取り出すとXは言う。

「しかし、これがあればあなたのお姉さんは結婚しなくてすむでしょう」

その声はどこか陽気である。

「なんだこれは？」

「薬です」

「これが一体どうしたというのだ？」

すると、Xはそつとティーナのポケットに薬を入れた。

「この薬はですね…… 人間を捨てられる薬です」

「……！ どういうことだ！？」

ティーナは慌てて聞き返す。

すると、Xはいう。

「そのまんまですよ この薬を飲めばその人は人でなくなる」

「では何になる？」

するとXは一息ついてから言う。

「魔物ですよ」

「！！」

啞然とした。

姫様が……お姉さまが魔物に？

何を言っているんだろうか？

「貴様！！ 姫を魔物にできるわけがないだろう！！」

「なぜですか？」

Xは続ける。

「魔物といっても外見や中身はたいして変わりませんよ？」

「だからといって魔物は魔物 高貴な姫をどうしてそうできる！！」

「なるほど……魔物だからと差別するのですね？」

「なに！？」

たしかにそうだ。

私は人と魔物は差別している。

「あなたのお姉さんはあなたが普通と違って何ら差別しなかった」

「……」

「ならあなただってお姉さんが魔物になろうが守ってあげればいい話じゃないんですか？」

「……」

そこまで言い終わるとXはくるりと振り返る。

するとXはこちらに手を振りながら言った。

「まあ、可能性は渡しておきます 使うか使わないかはあなたの自由ですけど……」

それでは

「ちよつと！！……待て！！」

ティーナは呼びかけるも、Xはふと姿を消してしまった。

一体何者だったのだろうか？

それよりもこの薬は何なのであるのか？

恐らく今までの奴の力からすれば本当のことなのだろう。

ティーナは一人決断を迫られていた。

もし、薬を使えばマリアは魔物扱いで当然結婚はなくなるであろう。  
しかし、マリアが魔物になってもいいのか？

その決断は少女にとって残酷なものにしかならなかった。

あなたならどちらを望みますか？ お姉さま……

私は……

ひとり城の外にたたずむ少女を月の光だけが照らしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2857j/>

---

暗黒姉妹

2010年10月9日05時45分発行